

長崎国体で三菱重工長崎が活躍

第24回国民体育大会は昭和44年に長崎県で開催された。開催県として全競技にエントリーすることができるが例年秋季に開催の県民体育祭をこの年は5月末に行ない、その決勝戦で三菱高島炭鉱を7-0で下した三菱重工長崎が国体に出場。準硬式の部も県庁、岡政(長崎)、三菱自動車(同)、親和銀行(佐世保)、長崎トヨタ(同)、長崎無線局(諫早)などが県民体育祭で国体出場をめざして戦い、決勝戦で県庁が親銀を3-2撃破し国体の出場権を得た。

軟式の部で国体初出場の三菱重工長崎には幸いに硬式野球部があり、ここ2年の間に同部から萩野良一(投手)や内野手の田中昭弘、橋本五郎、弦本匡功に、外野手では吉武常行を補強した。とくにこの年に転向してきた萩野は強力な戦力で、国体を前にした福岡専売との招待試合で完全試合を達成している。

初戦の岐阜戦は再三走者を出して好機を作るも一打無く延長16回に敵失から松山の右線二塁打が決勝点。同日の金沢電話局は前年度国

- 【一】 1-0 (岐阜)関ヶ原石材
- 【二】 2-1 (石川)金沢電話局
- 【準々】 1-0 (群馬)大和設備
- 【準】 0-1 (神奈川)厚木部品
- 【三位】 0-3 (静岡)静岡瓦斯

体の優勝チーム。同点の八回二死後に硬式から転向組の田中が左翼席に決勝ソロ弾して2-1の辛勝。

準々決勝の群馬(大和設備工事)戦も延長16回まで相手投手にノーヒット。17回に連打が出て二三塁とし代打の小崎秀和が2ストライクから右中間サヨナラ打。前日の2試合で25インニングスを投じた萩野はこの日も連投。九回無死一三塁も切り抜けて17回を散発6安打で完封した。

だが連戦となった準決勝の厚木自動車部品(神奈川)戦は二回に3安打集中され1点を許しこれが決勝点。打線も沈黙したままで、橋本が打った大飛球は2本ともポールの外側という不運さもあった。

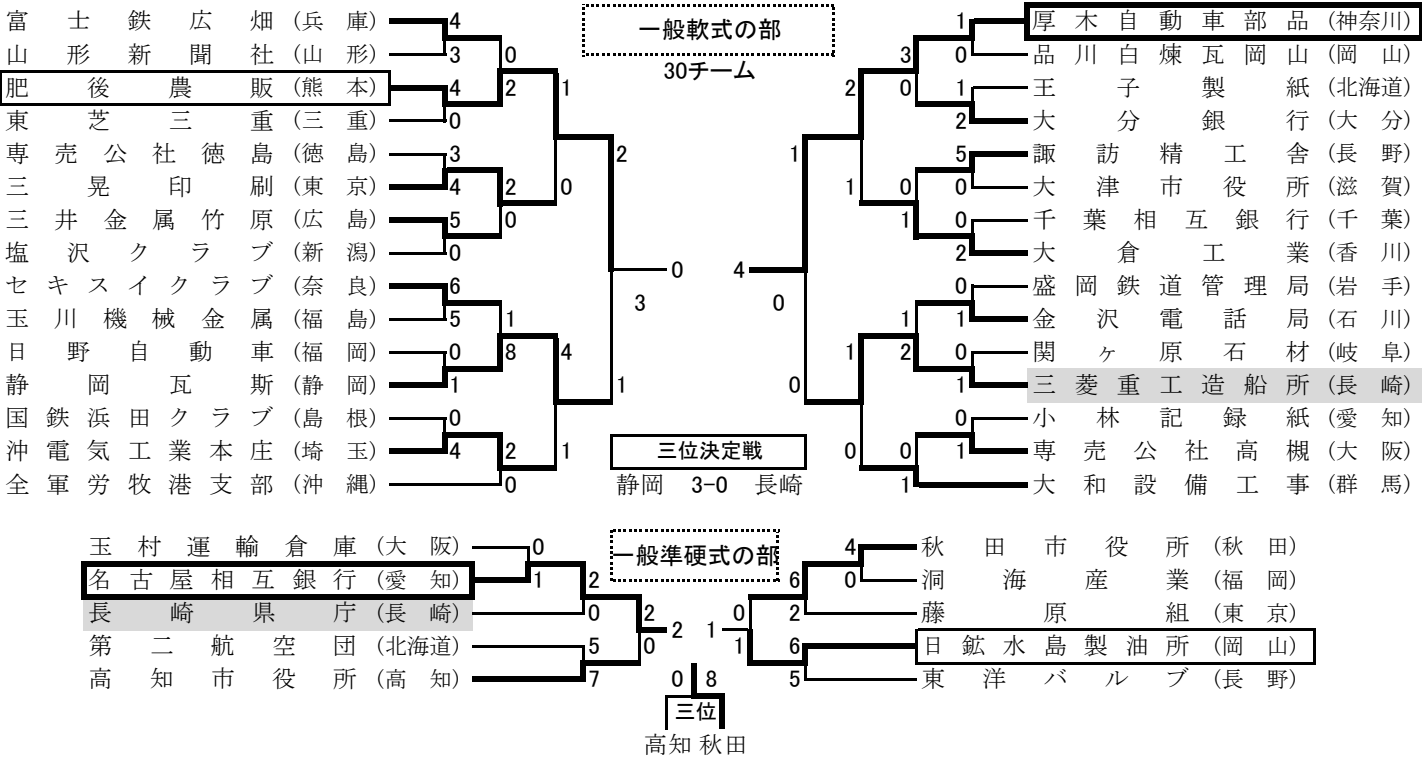
三位決定戦は静岡瓦斯。萩野以外の投手が登板し五、六回に3点失点。七回無死一三塁で萩野が登板。ここを抑えて打線に期待したがゼロ封された。

萩野は一日目に25回。二日目が26回。

三日間で53インニングス投じて失点2。前年まで三菱重工硬式野球部にいたとはいえ鉄腕ぶりだった。

三菱重工造船所のメンバー  
監督 竹本恵二  
選手 野原富安  
萩野洋一  
奥村良治  
江崎利男  
真崎重孝  
弦本匡功  
橋本五郎  
出村富男  
田中昭弘  
山田富嗣  
小崎秀和  
吉武常行  
中村義見  
松山靖彦

第24回国民体育大会 会期 昭和44年10月27日(月)~30日(木) 会場 長崎市、諫早市



国体軟式野球競技に一般準硬式の部が取り入れられたのは30年の第10回大会からで10チーム参加の九州枠は1。前年までの14年間は福岡の独壇場。地元開催で初参加。

長崎県庁は6月の常陸宮全日本準硬式に出場し2勝を挙げベスト8入りしており、3年前の41年大分国体に出場した藤岡石油店の山内英夫を補強して臨んだ。

二回戦から登場の県庁は名古屋相互銀行に対し前半は再三得点圏に走者を置いたが決定打が出ず。山内は我慢の投法で0-0延長戦。だが12回に2点を奪われ敗戦。

その後、国体準硬式の部に長崎からの参加は無く49年の第29回茨城大会をもって国体から姿を消した。

国体出場の重工と県庁が、県選手権で決勝対決

国体から2週間後に開催された第19回県選手権大会の決勝戦は推薦出場された2チームが勝ち上がり2年ぶり二度目の決勝戦対決。三回のワンチャンスに3点を挙げた重工が、萩野の1安打に封じる好投で大会3連覇。

8月に高知県で開催の天皇賜杯全日本には松早石油店が初出場するも、長崎国体で優勝した厚木自動車部品に0-1惜敗。

9月に愛媛県で開催の高松宮杯2部に初出場した中村クラブ(大村)は初戦突破(10-1)し、二回戦敗退(1-6)。

親和銀行時代の幕開け

長崎国体翌年の昭和45年岩手国体で、今度は親和銀行がベスト4入りを果たした。それまでの親和銀行は昭和29年と30年の九州準硬式大会で2年連続の準優勝している程度で目立つ存在ではなかった。県下選手権大会でも、12年ぶりに軟式が復活した41年に初めて決勝進出し準優勝。2年後の43年決勝戦でも三菱重工に敗戦の準優勝。

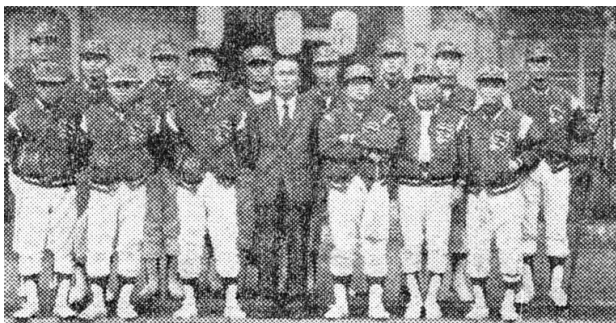
45年の岩手国体では準々決勝戦までの3試合全てを1点差でモノにし、京都戦では延長14回を戦っている。

- 【一】 2-1 山形新聞社
- 【二】 1-0 大和設備(群馬)
- 【準々】 2-1 京都市消防局
- 【準】 1-3 諏訪精工舎(長野)
- 【三位】 2-1 厚木部品(神奈川)

下手投げで変化球に冴えを見せる宮本と、制球力ではいま一つだが速球派の松尾義の継投で勝ち進んできた。

準決勝の諏訪精工舎(長野)戦は0-1で日没特別継続試合。翌日に再開後同点としたが1-3で敗退。三位決定戦ではベテランの山田が初先発。立ち上がりソロ本塁打された以外のワンヒットピッチングも味方の援護がなく0-1で厚木自動車部品(神奈川)に屈したが、全国大会初出場の親和銀行が前年長崎国体の三菱重工と同じ国体四位の成績は5試合を通じて無失策。曾木監督は就任1年目であった。

- 監督・ 曾木 毅
- 主将・ 渡辺 耐二
- 投手・ 山田 邦雄
- 宮本 博久
- 松尾 義徳
- 松尾 敏正
- 井手 国男
- 田中 幸穂
- 吉原 昭信
- 富永 伝二
- 香田 博
- 外野・ 岩下 猛
- 虎屋 良徳
- 下田 定道
- 岩佐 光和



写真は同年の県選手権大会前に長崎新聞に掲載された親和銀行ライン

この昭和45年の国体ベスト4が親和銀行時代の幕開けとなり、その後の中央大会の躍進や県軟式選手権大会の連覇へとつながって行く。

7年連続で長崎県勢の国体出場

国体軟式野球競技の参加枠は昭和30年代から63年まで28～30。九州開催年以外の九州枠は4で、この当時は佐賀県との西九州予選を経ての国体出場であった。

2年続けて国体4位の好成績を残した長崎県勢の軟式野球は、46年(親和銀行1勝)、47年(三菱重工長崎0勝)、48年(親和銀行0勝)、49年(松早石油店0勝)、50年(親和銀行0勝)と、7年連続で国体出場を果たしたが好成績は残せず、2年おいた53年に五回目出場の親和銀行も初戦で消え、5大会連続の初戦敗退となった。

昭和49年の長崎市民早朝野球Aクラスの部(43チーム)で優勝した長崎日野自動車が県連盟登録して、53年県選手権に初出場(ベスト4)。翌54年から大会3連覇を果たすと、54年第34回宮崎国体に西九州代表で初出場。

国体初出場でベスト8の長崎日野が県選手権3連覇

昭和48年夏の甲子園に出場した海星高エースの中村郁郎ら海星OBを主力に据えた長崎日野自動車が、54年の宮崎国体に初出場。福井(福井市役所)に4-1で発進すると、二回戦は群馬(東京三洋電機)を2-0と中村が完封。準々決勝の千葉相互銀行は国体や天皇賜杯大会での常連チーム。空しく0-6敗戦したが、準決勝からの3試合は台風襲来で中止。国体史上初の4チーム優勝となっている。

国体から帰って一か月後の県選手権大会に長崎代表で出場した長崎日野は順当に勝ち進み初の決勝戦進出。雨天順延した佐世保野球場で親和銀行を1-0で下し初優勝。55、56年の決勝戦も親和銀行を3タテし大会3連覇を達成。57年決勝でも親和銀行と対しV4を狙ったが、0-2で封じられた。その後、県選手権大会の出場は無く県連盟登録からも静かに消えて休部中の状態である。



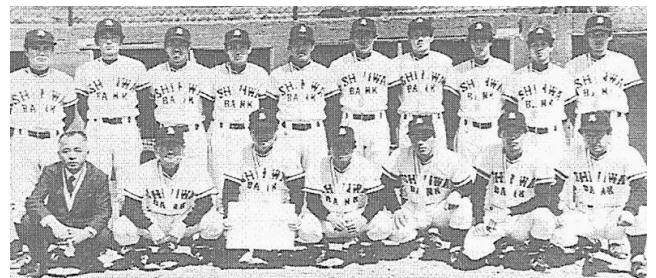
昭和54年県選手権大会で初優勝した時の長崎日野自動車

天皇賜杯でベスト8と、ベスト4の親和銀行

親和銀行は昭和45年国体が全国デビューで、49年まで国体には46、48年と三度出場。天皇賜杯全日本大会では46、47、49年と県代表になっているが白星が挙げられずにいた。四回目出場となった東京での50年第30回大会で初勝利すると4試合を戦ってベスト8へと躍進した。

初戦は開催地の東芝府中工場に4-1。金沢電話局(石川)に1-0辛勝すると、三回戦は三洋電機洲本(兵庫)に2-1と1点差勝利。準々決勝の日本鋳業水島(岡山)からは0-4で封じられたが、県勢として昭和31年第11回大会での住友潜龍鋳業所以来、19年ぶりのベスト8。

51、52年も県代表となったがどちらも2試合止まりで5年連続七回目の53年第33回大会では準決勝に進出。



昭和53年天皇賜杯全日本大会ベスト4の親和銀行

- 【一】 6-0 専売東北支社(宮城)
- 【二】 5-3 安売ビクトリーズ(島根)
- 【三】 3-2 東芝三重(三重)
- 【準々】 8-2 和歌山県農協組合連合会
- 【準】 0-3 ライト工業(東京)=優勝

- (監督)曾木毅 (主将)香田博
- 宮本博久・高藤文明
- 松尾敏正・辻章・坂井俊彦
- 小森秀敏・石田千二
- 竹山良次・岩佐光・小栗辰夫
- 古川一彦・一ノ間繁則
- 山下耕三・村竹博志

長崎県勢高校軟式野球の全国大会での活躍ぶり

昭和45年は国体初出場の親和銀行が四位の好成績を挙げた長崎県軟式野球界であるが、国体高校軟式野球の部に出場した上五島高校が高校の県勢として全国大会初優勝を果たした。

上五島高はそれまでの全国軟式大会に二度(S41、S43)出場、共に国体まで進出して41年は4強。43年には準優勝を達成していた。44年長崎国体においては県予選会の準々決勝で壱岐高に敗戦(1-2)し、国体には同じ離島の宇久高が出場している(初戦で札幌商に1-4)。

45年の全国大会県予選決勝戦は上五島-同・奈良尾分校の兄弟校決戦。5-3勝利の上五島は北九州大会でも2勝して全国大会へ。初戦で山口の小野田工に0-2敗退したが、秋の国体にも出場できた。

初戦の岩手(住田)を3-0、準決勝の東京(早稲田実)を4-2で撃破した決勝戦の相手は、夏の全国大会で苦戦した小野田工。1-1同点の延長10回表に決勝点を挙げて2-1の国体初優勝を飾った。その立役者は一人でマウンドを死守した犬塚虎夫。後に上五島ブローズなどで一般軟式野球を楽しんだが61歳で他界した。

この昭和45年の長崎県内高校野球チームは硬式30校に対して軟式は33。一回戦からだど6試合を勝ち進まなければならなかった。

翌46年の全国高校軟式大会で優勝したのが初出場の口加高校。県予選大会準決勝で対した上五島に0-2から七回に逆転勝ちした口加は北九州大会も突破。全国大会初戦の松山商(愛媛)を延長11回の末2-0。渋川市工(群馬)と熊本商の2試合とも、木村広が1-0完封。浜田(島根)との決勝戦は三回2点を先取し着実加点で5-2。

和歌山国体では静岡商に対して初回に双方1点ずつを挙げて延長20回裏、二死一二塁にサヨナラ打された。

エースの木村は日大で硬式転向。昭和51年に太平洋クラブ(現西武)に入団。日本ハム、大洋(現横浜)などで10年間在籍した。

◇ - ◇ - ◇ - ◇ - ◇ - ◇

全国高校軟式野球大会は昭和31年に始まった。九州からの代表は2チームで北(南)九州ブロックの1校が全国大会進出しているが、近年では佐賀や沖縄には軟式校が無く両ブロックとも3県で1代表を決めている。

| 年度 | 代表校      | 全国大会     | 国民体育大会  |
|----|----------|----------|---------|
| 34 | 対馬高校     | 初戦敗退     | 初戦敗退    |
| 36 | 対馬・豊崎分校  | 1勝・ベスト8  | 初戦敗退    |
| 38 | 壱岐高校     | 1勝・ベスト8  | ※       |
| 41 | 上五島高校    | 1勝・二回戦敗退 | 1勝・ベスト4 |
| 43 | 上五島高校    | 初戦敗退     | 2勝・準優勝  |
| 44 | 宇久高校     | 北九州で敗退   | 初戦敗退    |
| 45 | 上五島高校    | 初戦敗退     | 3勝・優勝   |
| 46 | 口加高校     | 4勝・優勝    | 初戦敗退    |
| 47 | 上五島・奈良尾分 | 初戦敗退     | ※       |
| 49 | 宇久高校     | 4勝・準優勝   | 2勝・準優勝  |
| 53 | 松浦高校     | 初戦敗退     | ※       |
| 54 | 中五島高校    | 初戦敗退     | ※       |
| 55 | 口加高校     | 初戦敗退     | 1勝・ベスト4 |
| 56 | 口加高校     | 1勝・二回戦敗退 | 初戦敗退    |
| 59 | 平戸高校     | 初戦敗退     | ※       |

49年宇久高校エースの増本宏投手は九産大から大洋に入団。実働8年間で109試合に登板。防御率4.17。

県連盟の10地区が分離独立して16支部となる

昭和45年第20回記念の県選手権大会で8年ぶりに10地区が出そろい、翌46年に金属バットの使用が公認されると打者有利の軟式野球が展開されるようになった。

昭和47年には長崎新聞社との共催による『長崎県少年軟式野球大会』が学童と中学の二部で開始され、少年たちに正しい野球の指導と育成を推し進めた。

同年の県選手権大会で三菱重工長崎が未踏の6連覇を達成し、それまで準硬式時代の36年から40年まで日本冷熱工業が持っていた大会5連覇の記録を上回った。

翌48年県選手権大会では、7連覇を目指す三菱重工長崎が平戸クラブに敗れる(3-4)大波乱で幕を開け、初日の4試合で4本の柵越え本塁打が出るなどの熱戦を展開。決勝戦はカワシモスポーツ(佐世保)と諫早ドッグブラザの初出場対決。1-1の延長21回表に、佐世保の米丸和彦が左翼席に叩きこみ3時間50分の試合にケリつけた。

49年の県選手権から福江・南松が分離し、上五島連盟が誕生。それまで福江島チームの独壇場であったが上五島支部第1号の代表は有川クラブ。得点を挙げられずに初戦で消えた。この年の県民体育大会は第一日に3試合消化したところで雨。翌日も雨には勝てずに打ち切りで大会中止となった。

また同年の全国高校軟式で4勝挙げて決勝戦進出した宇久高校は県岐阜商に1-5の準優勝。秋の茨城国体でも2勝して決勝進出。地元の竜ヶ崎一高に3-6敗戦は2大会の準優勝。称賛に値する成績であった。

◇ - ◇ - ◇ - ◇ - ◇ - ◇

昭和50年の県選手権大会まで『平戸/松浦/北松』地区で参加していたが、51年に分離しそれぞれの支部組織(北松浦郡は県北支部)が誕生。第26回県選手権大会から3支部代表が参加し、松浦代表の日本ダッジファイバー(後の中興化成工業)が2勝してベスト4に進出している。

平戸大橋が52年4月に4年の工期で完成して離島では無くなり、3地区のころから県選手権の常連だった平戸クラブの遠征も楽になったが、昭和56年の第31回大会までに11度出場するも白星は2個。その初白星が48年の第23回大会開会式直後の第1試合。大会6連覇中の三菱重工長崎に対して初回と三回に2点ずつ挙げると、六回に3点返されたが逃げ切った金星は嬉しい選手権初勝利。

2個目の白星は、2年後の50年で有明クラブに先制攻撃を仕掛け2点を奪い、宮本投手が完封で仕留めた。

県選手権では56年まで2勝11敗の戦績だった平戸クラブが57年の第4回西日本1部長崎県大会で優勝し、大阪での西日本大会に出場。初戦で山口に敗退(6-8)したが、翌年から平成4年までの10年間はA級登録だった。

また松浦支部の日本ダッジファイバー(52年から中興化成工業)も中央大会への出場は無いが、同じ松浦支部の御厨クラブに代わって平成元年から5年までにA級登録をしている。

◇ - ◇ - ◇ - ◇ - ◇ - ◇

昭和54年に諫早/北高と大村/東彼が分離し15支部となり、3年後の57年に島原/南高が分離し16支部となった。

### 高松宮賜杯全日本2部で上対馬漁協がV

国体や天皇賜杯の大会はA級チームが活躍する場となっているが、BクラスやCクラスの高松宮賜杯全日本選抜大会でも長崎県勢が活躍している。

全軟連がABCのクラス分けしたのは昭和25年から各都道府県では級別の大会を開催するように指導し、30年に北海道から九州までの9ブロックでB級とC級のブロック大会が一斉に開始されると、32年にB級とC級の第1回全日本選抜軟式野球大会が始まり、34年に高松宮宣仁親王殿下から高松宮杯が下賜された。

その1部に県勢として初参加したのは昭和43年の第12回大会。諫早クラブが九州2枠の一角として出場も愛知に0-2の初戦敗退。48年の有明町クラブ(南高)も初戦の静岡に2-4で苦杯。それから58年までの10年間は、1部での長崎県代表の出場は無い。

2部は35年の西高クラブ以来、7年ぶりの42年に浜崎水産が1勝(4-1:岐阜)。翌年の12回大会は海上自衛隊大村が出場するも0-7で岐阜に初戦で敗退。続けて大村の中村クラブは44年の13回大会で、初戦の長野に対して10-0と大勝。準々決勝の山口に1-6で敗退して、第1回から49年までの18回のうち5大会参加の4勝5敗が高松宮賜杯2部での長崎県代表チームの戦績。

昭和52年高松宮賜杯2部の長崎県大会は、上五島軟式野球連盟創立3周年記念として初めて離島・上五島の地で開催された。大会前々日の木曜日は防雨風で開催も危ぶまれ延期も止む無しと判断した当時の前田英敏理事長(故人)は同じ離島からの出場である上対馬漁協チームに連絡を入れるも、既に対馬を出発した後で連絡の取りようが無いまま大会前日を迎えたが、天は上五島連盟に味方して天候は回復。本土からのチームもフェリーで来島し13チーム参加の長崎県大会は無事に始まった。

そこで対馬勢として県大会初優勝した上対馬漁協は九州ブロックも突破し栃木県で全国大会優勝の快挙達成。韓国まで海路49.5kmの国境の島「対馬、北端の町」チームの偉業は末端町予選会から15連勝の全国優勝であった。

|                  |                    |     |                    |
|------------------|--------------------|-----|--------------------|
| ◆全国大会優勝までの戦績◆    |                    | 九州  | 8-0 有田白嶺(佐賀)       |
| 上対馬町予選=7チーム参加で3勝 |                    |     | 4-3 国東クラブ(大分)      |
| 対馬予選会=6町対抗戦で3勝   |                    | 【一】 | 8-1 札幌市水道局(北海道)    |
| 県                | 【二】 3-0 朝長時計店(長崎)  | 【二】 | 8-4 岸和田市役所(大阪)     |
| 大                | 【準】 3-2 有川クラブ(上五島) | 【準】 | 7-4 ニューモンスターズ(鳥取)  |
| 会                | 【決】 9-0 ブローズ(上五島)  | 【決】 | 3-1 河合楽器ファイターズ(静岡) |



(監督) 辻 三則 (主将) 武末 俊紀 (投手) 財部 清志・大浦 康伸  
飛田 真宏 (捕手) 大浦 正行・扇 康一・犬束 俊治 (内野手) 扇 千摩男  
扇 秀雄・扇 寿光・広田 博実・小島 俊実・菅野 修 (外野手) 梅野 時吉  
園田 日出男・武末 芳次・菅野 正昭・比田勝 政人・比田勝 安之

この上対馬漁協の全国優勝について『長崎県スポーツ史』には次のように記されている。

Cクラスとはいえ上対馬漁協の優勝は離島チームでも『やればできる』ことを証明したものであり、離島チームに希望を与える価値ある栄冠だった。

初めて九州ブロック代表として全国の舞台に立つことになった上対馬漁協。県予選や九州予選での戦いぶりからみて自分たちの力と技が全国で通用するかどうか不安感があったのは事実。「なんとか1日目の2試合だけでも勝ちたい」というのが辻三則監督の願望だった。

ところが、扇寿光と武末俊紀の俊足1、2番コンビがよく塁に出る。扇千摩男、菅野正昭、大浦康伸のクリーンアップの打棒も火を噴き、いずれの試合にも早い回に得点を挙げる先制攻撃に成功。札幌市水道局を8-1と一蹴したのを皮切りに、岸和田市役所を8-4、翌日のニューモンスターを7-4と連破して最終日の決勝戦へコマを進めた。

優勝を争う相手の河合楽器ファイターズは前日の準決勝で大量23点もの得点を奪った強打のチーム。「これはいやな相手と思った」(辻)が、バッティングはあてにならない…と球界で言われている通り。上対馬高校軟式野球部出身のエース大浦康伸が連投の疲れも見せず、伸びのあるストレートと切れのよいカーブでこの強力打線を1点に抑える快投ぶり。味方打線も3点を挙げて好投の大浦をバックアップし、栄冠を勝ち取った。

「無欲がアレヨ、アレヨという間に優勝した」(辻)といえるが、それにしてもこんな楽なゲームばかりとは…、アツけないくらい。辻監督が「むしろ、0-0のまま一死満塁制で勝利を握った県予選一回戦の朝長時計店(長崎)戦や、4-3で勝った九州代表決定戦の国東クラブ(大分)の試合が苦しかった」というのもっとも。

ともあれ対馬スポーツ界にとって全国優勝は初めて。上対馬町内のパレードや祝賀会が開かれ、町を挙げての『祝勝・上対馬漁協』に沸いたのはいうまでもない。当時はまだ漁業の景気が良かった時代。同漁協では選手の旅費の補助もしたが祝賀会にもかなり経費をかけたようので、盛大だったとか。

### 2年後の高松宮賜杯2部でベスト4の轟クラブ

上対馬漁協が優勝した翌年は長崎県からの出場がなかった高松宮賜杯のCクラスであったが、2年後の54年第23回大会に出場した轟クラブ(北高)は、開催地の東京代表(日本石油加工)に3-0。北海道(石田病院)を1-0と封じたが、準決勝で広島大洲電話局に2-4敗戦したベスト4。

(監督) 佐藤 均蔵  
川田 順一、道副 喜文、山口 義春、増山 哲郎、久世 文彦  
伊東 章義、伊東 康隆、東川 静夫、峰松 俊蔵、田中 玉留  
中溝 勝、道副 直、松尾 高志、浜崎 茂、立岩 広明、津田 良信

それから2年後の56年第25回2部には上五島のファイヤーバードが岐阜県の地を踏んだが初戦で消えた。

その後、昭和が終わる63年までに高松宮賜杯2部全国大会に長崎県勢の出場は無く、32回の大会で8チームの出場だけで昭和を終えた。